

マーシャル諸島及びウオッセ島

1. マーシャル諸島の概況

マーシャル諸島は、北緯4°30′～15°、東経161°～175°の間に幅約370キロメートル、長さ約930キロメートルにわたって北西から南東に延びる2列のラタック及びラリック両列島(ラタックは土語で日の出、ラリックは日没の意—サン・ライズ列島、サン・セット列島ともいわれる)からなり、34個の環礁と867の珊瑚島からなっている。陸地の総面積は170km²。

環礁内の各島は平坦で、たまに標高8メートルあまりの所もあるが、多くは1.5メートルから6メートルの高さに過ぎない。気温は、年間を通じてほとんど変化なく27度～28度で年中スコール性の雨が多く、植物はよく繁茂し、椰子、バナナ等を多く産する。また、コブラは重要な輸出資源である。

原住民は、ミクロネシア系カナカ族が主で人口は約30,000人である。同諸島は大正8年にカロリン諸島とともに日本委任統治領となり、第2次大戦後は、アメリカの信託統治領となり、1979年5月1日にはマーシャル諸島共和国の自治政府が発足した。首都はマジュロ、美しい環礁の町である。

2. マーシャル諸島の戦略的価値と防備の状況

マーシャル諸島の各島は、地積が狭いうえに平低で、しかも地下水が浅く防備施設の構築はきわめて困難な状況であるが、同諸島に有力な地上兵力を配置するときは、海上戦力と相まって、進攻敵艦隊に対する戦略優位を占めうる重要地域であった。

開戦初期におけるマーシャル諸島は、中部太平洋方面の海軍の前進根拠地として作戦部隊の基地となり、その後も長期にわたって航空及び潜水艦の各部隊の基地としての機能を果たしたほかウェーキ島及びギルバ

ート諸島方面に対する中継補給基地としても重要な役割を果たしていた。

以上の理由から同諸島には多数の航空基地が建設されたが、地上の防備施設は地形上の制約にあってほとんどが上空に暴露したままであった。しかしながら、米軍のソロモン方面における反攻やギルバート諸島の失陥等から地上防備の強化が叫ばれたが、船腹の不足と米潜水艦や航空機の行動が活発化したため、鋼材、セメント等の資材の輸送が困難となり、ために飛行場以外には満足な防備施設を構築することができず、他は大部分が“たこつぼ”程度の貧弱なものであった。

マーシャル諸島は、海軍の第6根拠地隊が開戦後から昭和17年中期ごろまで守備し、その間兵力にも大きな変化はなかった。ウオッセ島においては16年11月編成進駐の第53警備隊が17年4月第64警備隊に改編(司令 吉見信一大佐)。同年8月アメリカ軍のマキン島奇襲以来逐次戦力を増強し、翌18年6月にはミレ島に第66警備隊(司令 志賀正成海軍大佐)が新設された。また、陸軍部隊も昭和18年9月上旬フィリピンから歩兵第122連隊が中部太平洋方面に転進し、南洋第一支隊(支隊長 大石千黒陸軍大佐)として改編され、同年12月マーシャル諸島のミレ、ウオッセ、マロエラップの各島において編成を完結した。さらに昭和19年1月初旬海上機動第一旅団がエニウエトク(ブラウン)島に配備された。

3. マーシャル諸島に対するアメリカ軍の進攻

アメリカ軍の機動部隊は、昭和19年1月30日、突如マーシャル諸島に來襲し、クエゼリン、ロイナムル(ルオット)、ウオッセ各島のわが航空基地を攻撃した。一方、ギルバート方面のアメリカ航空部隊もこれに呼応して2月1日まで連日の攻撃を続け、わが航空部隊はまったく反撃の余裕すらなく航空機のほとんどを地上において破壊された。さらに、2

月1日早朝から猛烈な艦砲射撃の掩護のもとに、マーシャル諸島におけるわが軍の心臓部たる北部のクエゼリン島及びロイナムル(ルオット)島に上陸を開始した。

- (1) ロイナムル(ルオット)島は2月3日、0400小部隊に分れて、最後の突撃を敢行し、全員玉砕した。クエゼリン島も2月5日全員玉砕。
- (2) 更にエニウエトク環礁においても2月19日より米軍が各島に上陸をはじめ、エンチャピン2月19日、エニウエトク2月22日、メリレンが2月23日全員が玉砕した。
- (3) ヤルト、ミレ、マロエラップ、ウオッセ各環礁

米軍は、ギルバート諸島攻略後マーシャル諸島一帯の日本軍基地を空襲し、施設、飛行場を破壊したが、前記の戦略上不可欠な環礁を占領したあと、日本軍が比較的多くの兵力で防備していた、ヤルト、ミレ、マロエラップ、ウオッセの各環礁を除き、19年4月上旬までにマーシャル諸島の掃討または占領を完了した。

ヤルト、ミレ、マロエラップ、ウオッセにおいては、米軍の攻略を免がれたものの、米軍の絶対制海制空権下に孤立し、昭和19年6月から終戦にいたるまで補給の断絶した島々で飢餓との戦いを強いられたのであった。

「註」「マーシャル、ギルバート諸島慰霊巡拝のしおり」(厚生省援護局)から一部抜粋

4. ウオッセ島の概況

ウオッセ環礁はマーシャル諸島共和国の首都マジュロから北北西290軒にあり、ウオッセ島はその主島、北緯9°27'31"、東経170°14'32"の地点にある。成田から空路6,082軒。全長約3000米、最大幅700米の勾玉状の小島である。マーシャルのgarden atoll(農園環礁)として知られ、食糧の生産力向上のため日本から土壌を輸入したともいわれている。島には、航空機の滑走路2本(80米×1500米 NW、80米×1050米 NE)、そしてここを除いて全島で椰子、パンの木をはじめ樹木が鬱蒼と茂る。

筆者の戦後書いた手記がある。

「ルオットから天山で飛ぶ。1時間もかかるまい。飛行機が反転したと思うと、目の下にウオッセの環礁が浮んだ。濃紺の太平洋の真中に白い波頭で彩られた浅礁と小さな島々が輪をなしている。そしてその環礁の内外を紺青の色が幾重にも濃淡をかえている。

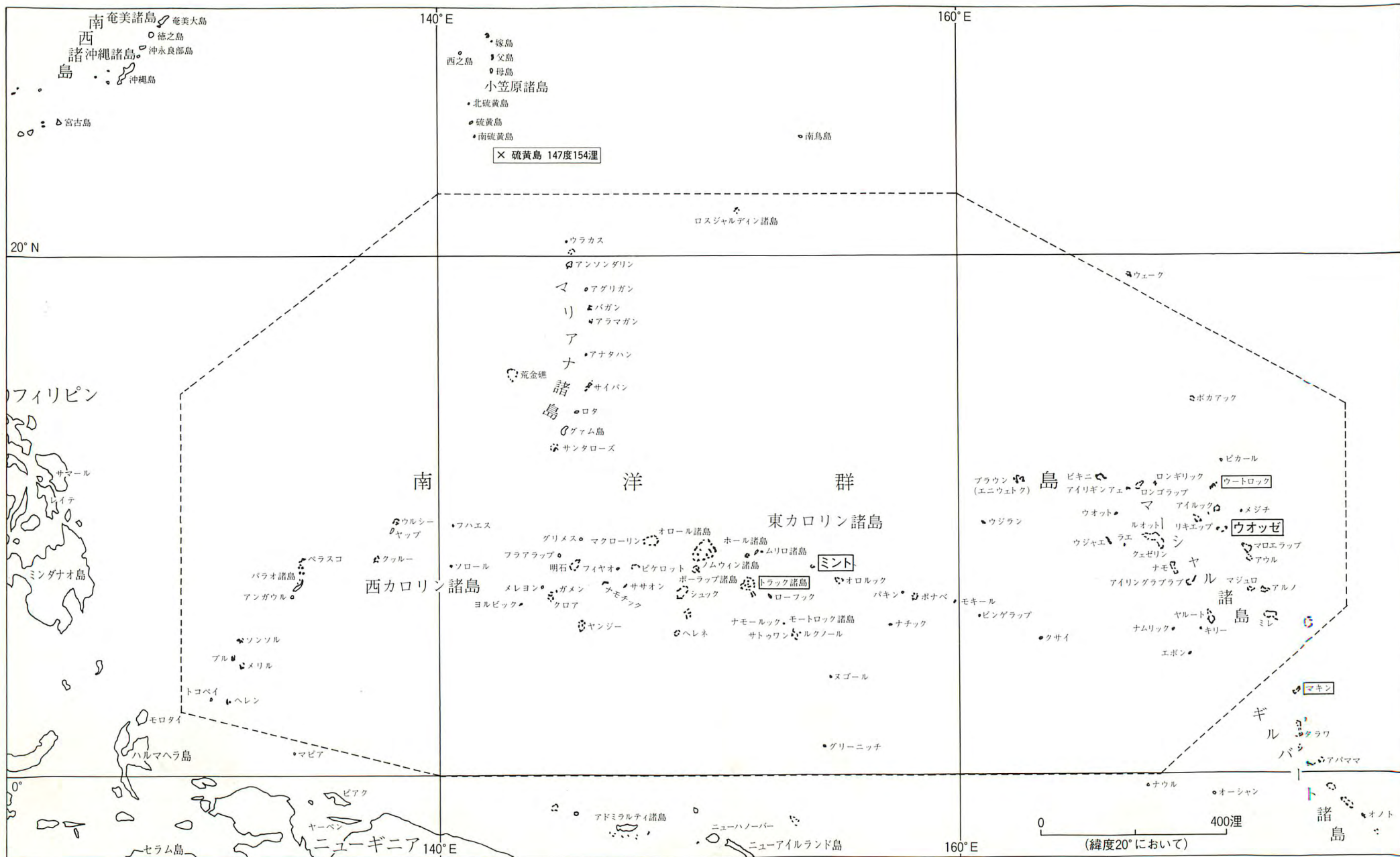
この島々の中の一つにウオッセ基地がある。敵の反攻を目の前にして、最前線に在るこの島を、空からこの上もなく心もとなく思った。しかし戦争さえ考えなければ静かな緑の濃い美しい南の楽園の想いさえある。米軍進攻の前には、米空軍の偵察、空襲がたまにある程度であった。

昭和19年1月末の米軍の来攻を境に様相は一変する。それから1年有半、この島の木という木は根こそぎにされ、一切の人工的なものは崩れ去り、島中が穴だらけ、瓦礫の土地に化する。そして敵に対する戦い、餓に対する戦い、集団と集団、人と人、肉体と精神との生死の限界における戦いが続けられる。3千を超える将兵、故国の山河に相まみえたものの僅かにその3分の1、神でなくとも、この1年有余の孤島の推移、その戦いの終末の時を若し知り得たならば、救い得たものは幾ばくであつたろうか。それから20数年、今、平安と豊稔の中に在って悔恨と慚愧の気持を持ち続けている。小生等は10月末、鳳翔の迎えを受けて帰途に着く。消え行く島影を見つめながら、いつかこの土地に再び還り来て、鬼哭する戦友の霊を慰めることの出来ることを祈っていた。」

この時から48年を経て昭和68年8月28日、この懐しい島に再び足跡を印した。昔のままの島が広がる。潮騒、青い空、強い陽ざし、昔より大きくなったように思える椰子の木、パンの木、そして深い樹々の茂みが続いている。内海のほとりに立つと白い砂浜の前に礁湖が静かに拡がり、遠くに離島を浮べている。そして昔の棧橋の残骸が見える以外人工のものは何もない。そして人もいない。太古の静けさの中にある想いである。

平和な島がそこに在った。

南洋諸島概図—戦歴図



第531海軍航空隊の隊歴

第531海軍航空隊(531空)は、昭和18年7月1日天山一一型艦上攻撃機36機及び輸送機1機をもって、館山海軍航空隊内において編成。

北千島方面への展開

昭和18年9月、北千島方面に隊の総力をあげて進出。

一部ラバウル進出

昭和18年11月14日、ラバウル方面航空兵力増強のため、兵力の一部(天山12機)がラバウルに進出、第一基地航空隊指揮官の指揮下に入る。

「註」戦史叢書428頁。

マーシャル諸島方面に進出

ギルバート諸島、マキン、タラワ両島の失陥による戦局緊迫に伴う航空戦力増強のため、本隊は、館山及び北千島の播鉢・片岡両基地に派遣隊を残し、天山21機をもって3次に分けてマーシャル諸島ウオッゼに進出。12月23日展開完了。

第3次進出時、艦攻4機の空輸指揮官(飛行長大串秀雄少佐)は輸送機に搭乗、12月19日硫黄島発進後同島147度154海里付近に不時着した模様で消息を絶つ。戦没者 大串少佐以下11名。

「註」戦史叢書484頁。

マーシャル諸島沖航空戦

昭和18年12月5日、マーシャル諸島沖航空戦において天山6機をもつ

て索敵ついで天山6機(指揮官飛行隊長松崎三男大尉)0630ウオッゼ発マロエラップにて雷装に換え、米機動隊を攻撃、0940以後消息なく攻撃隊は全機未帰還となる。戦没者ウオッゼ島北方海域(ウトロック島北20海里付近)にて松崎大尉以下18名。

「註」戦史叢書509頁、513頁。

マキン島方面に対する偵察・攻撃に活躍

マキン島黎明爆撃

昭和18年12月25日、0300天山3機をもってマキン島東端ブタリタリ飛行場を攻撃。

米グラマン機との空中戦にて1機被弾自爆。

戦没者 埴光太郎少尉以下3名

マキン島昼間爆撃

昭和18年12月25日、0615天山4機をもってブタリタリ飛行場を攻撃、1機被弾不時着行方不明となる。

戦没者 召田俊夫少尉以下3名。

「註」戦史叢書540頁。

マーシャル諸島攻略のため来襲せる米機動部隊との戦闘

昭和19年1月30日、クエゼリン・ルオット基地攻略のためマーシャル方面を急襲した米機動部隊を邀撃、その戦闘において6機を失う。

戦没者 18名

マーシャル方面残留搭乗員の収容

昭和19年2月1日、今後の航空部隊再建のためマーシャル方面に残留の搭乗員を収容することとなり、2月5日飛行艇2機来島、搭乗員を収容トラックに向うが、531空搭乗員の乗る飛行艇がミント礁(トラックの東北東約150海里)南方に不時着。2月6日全員行方不明となる。

戦没者 井上英男大尉以下30名

「註」戦史叢書606頁。

部隊解散

全飛行機を失い、搭乗員また全員戦死。

ここに昭和19年2月20日をもって、第531海軍航空隊は、北千島の氷の島の空に、また紺碧の南太平洋の大海原の上に、勇戦奮闘遂に全滅したその7ヶ月余の短い歴史を閉じる。

基地隊員は全員第4艦隊司令部付、あるいは第64警備隊付となる。

孤立そして饑餓との戦い

昭和19年1月以降簡易な無電以外、外部との連絡を全く絶たれ、勿論一片の補給もなく全く孤立、米軍の絶間ない攻撃と想像を絶する饑餓との戦いのうちに昭和20年8月終戦を迎える。

在島戦没者 118名

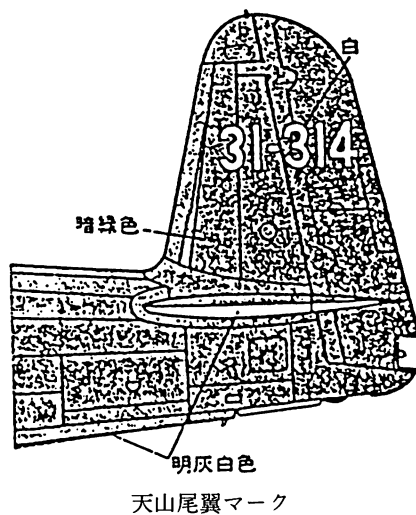
昭和20年10月30日、迎えの鳳翔にてウオッセ島を去り、11月9日浦賀着。

全戦没者 206名

生存者 58名

「註」戦史叢書 中部太平洋方面海軍作戦(2)
(防衛庁防衛研究所戦史室著)

「註」日本時間と現地時間の時差は約3時間。
0630は現地時間0930。現地では0300頃
夜明け、0900昼飯、1500頃日没。
隊歴の記事はすべて日本時間。



内収 2
19.7 ~ 19.2.19 89 531 空
19.20 ~ 20.8 115 64 警
206

第531海軍航空隊 戦没者名簿

1. 館山基地にて訓練中事故により戦没 昭和18年8月12日
合田 邦男
2. 北千島基地にて事故により戦没 昭和18年11月12日
玉田 政一
3. マーシャル諸島沖航空戦にて戦没 昭和18年12月5日
戦没者 18名
松崎 三男 中原 善市 橋口 実
馬場 将尋 山田 光雄 中島 三郎
小吹庄次郎 福田 栄 安藤 英雄
児子 力 伊藤 仁 遠藤 三郎
池田 政雄 浜田 文三 尾美 与平
山本 二郎 松本 莊平 渋谷 清喜
4. ウォッゼ着陸時、米飛行機の銃弾により負傷、戦没
山元 良男 昭和18年12月16日
5. マーシャル方面第三次進出作戦において戦没
戦没者 11名 昭和18年12月19日
大串 秀雄 小林伊三郎 清水 俊幸
山根 照登 高木 直明 新 佐一
明石 只男 大下 末成 蜂須賀輝三
坂口 昇 牧 勇
6. マキン島攻撃にて戦没 昭和18年12月25日
戦没者 6名
塙 光太郎 東島富士夫 宮川 洵治
召田 俊夫 遠間万喜太 桜井 七男
7. 用務を帯びトラック島へ出張中、同地にて戦没
田中 四郎 昭和19年1月6日
8. 横浜・サイパン間にて空輸、哨戒中の802空飛行艇に便乗、行方不明となる。 昭和19年1月19日
田中 明
9. マーシャル方面進攻の米機動部隊との戦闘にて戦没
戦没者 18名 昭和19年1月30日
窪谷 明朗 横山庄八郎 川村 善吉
広池一二三 石川 重一 征矢 博門
大久保秀雄 逸見 春雄 井勢 吉雄
鷲坂 弥十 福富 勝造 塚本喜代次
甲賀 正二 神田 幸雄 岡 芳美
藤森 初雄 松尾 武登 杉田 昇

10. マーシャル方面残留搭乗員の収容作戦において戦没
戦没者 30名 昭和19年2月6日
井上 英男 赤坂 好悦 久代 博
矢島 哲 長瀬 兵衛 山崎 啓三
浜崎 純利 森 資隆 吉岡 道雄
鹿野内正一 田沢 喜一 高木 修
坂手大繁 小林 政信 萱原 重典
小田 博 高嶋 隆行 野田 勝
樋口 弘良 幸田 卓 田代 金六
安田 善樹 中村 佐美 鈴木 鋼作
米沢 幹 諏訪 泰敏 増田 謹次
寺尾辰三郎 金子 正雄 三輪 清造
11. ウォッゼ島における戦没者
昭和19年2月 戦没者 4名
19日迄に 山田 正 南 信雄
世古 波平
20日以降 黒田 清一
3月 戦没者 1名 伴野 敏夫
4月 戦没者 2名 岡本 彰 坪井 栄
5月 戦没者 2名 高島 昭男 上田 清一
6月 戦没者 4名 宮本 秀松 高見 実 白川 昭次
鋤柄 八郎
7月 戦没者 3名 瀬並 健一 中本 幹夫 三好 武士
8月 戦没者 13名 山野政吉郎 國島 勇雄 松林 英夫
藪本 弘蔵 沼田 安正 山田 馨
宮本 啓一 相馬 秀肆 花房 清之
宮島 一男 田角 八郎 松本 実
井上 三男
9月 戦没者 10名 二又 重男 福西 昌和 池田 好美
川原真佐美 但木 甚助 中島 静夫
安福 敏郎 飛田 実美 井上 康三
広野 忠雄
10月 戦没者 7名 中山 肇 中林 正行 大熊 金吾
谷口 実治 松田喜右エ門 藤井 演乘
小林 惣次

- 11月 戦没者 11名
棚橋 光雄 山岸 英雄 奥村 孫一
前田 守一 井垣 一郎 宗本 義男
秦 永喬夫 岡橋 保 木村 次郎
寺田 卯三郎 長田 正次
- 12月 戦没者 8名
村瀬 藤雄 剣持 訴造 寺本 初一
山室 勉 仲倉 一郎 栗山 厚美
福元 十太郎 松井 竜平
- 昭和20年1月 戦没者 13名
石崎 信夫 石塚 重道 市川 義信
神谷 正 横山 光宏 中川 静也
井上 信二 大林 逸郎 橘 良市
吉原 一 堀江 良作 中村 松治
宮島 喜代三
- 2月 戦没者 19名
石川 秀吉 寺内 求 高橋 定雄
下地 広助 中川 福雄 歟田 清
中津 義一 梨本 啓三 横山 栄
山本 久男 牧村 義之 宮田 勇
藤本 亀雄 近藤 清 柴田 茂則
竹下 清市 山本 安雄 安 山平
山根 昇
- 3月 戦没者 7名
知野 寅男 有木 茂 安田 徹
宮田 貞信 村田 耕一 上倉 正夫
平井 芳政
- 4月 戦没者 4名
福島 達之助 赤木 逸治 伊藤 茂
住岡 昭三郎
- 5月 戦没者 2名 志水 富夫 大林 喜太郎
- 6月 戦没者 1名 長岡 三友
- 7月 戦没者 6名
勝又 武平 相本 正造 西 秀夫
田中 修 岡野 元次 黄倉 与吉
- 8月 戦没者 1名 江口 三郎

鎮魂 ウオッゼ島

発行日 ● 昭和62年9月1日

発行・編集 ● 篠崎英夫

東京都新宿区市谷葉王寺町30

葉王寺マンション608

TEL03-357-7957

印刷・製本 ● 大日本印刷株